



本阿弥現代俳句シリーズⅦ

句集 京育ち

中野青雁

本阿弥書店

# 著者略歴

中野青雁（なかの・せいがん）本名美代子

大正12年4月3日 京都市に生まる

昭和52年 森田青霞に俳画を師事

昭和53年 「砂丘」竹中碧水史に俳句を師事

平成元年 「砂丘」同人

現住所 〒590-0958 堺市宿院町西4-1-15-401

電 話 0722-21-6529

---

\*句集 <sup>きょうそだ</sup>京育ち <本阿弥現代俳句シリーズⅦ>

1998年8月30日 初版

定価：本体2800円（税別）

著 者 中野 青雁

発行者 本阿弥秀雄

発行所 <sup>ほんあみ</sup>有限会社 本阿弥書店

東京都千代田区猿楽町2-1-8 三恵ビル 〒101-0064

電話 03(3294)7068（代） 振替 00100-5-164430

印 刷 三和印刷 製 本 松栄堂製本所 (1206)

---

©Seigan Nakano 1998

ISBN4-89373-324-9

## 序

中野青雁さんは大正十二年に京都市で生まれ、現在は堺市に在住の「砂丘」同人。

昭和五十二年森田青霞先生へ俳画を師事されて、俳画の味を深めるには俳句の勉強が不可欠というを感じられて翌年には「砂丘」に入会、五十九年には松竜塾俳句教室の開設にも協力されて句力を伸ばされた。

青雁さんは京都生まれで、祇園祭や葵祭を再々に句とされているが、上七軒その他花街のしきたりにも精通されているので、他の人には詠めない花街の句を積極的に詠まれることを奨めた。句集の巻頭一句目が、

「ヨロイヤサー」都をどりに間に合へり

であるのは偶然ではないと思う。

枝垂れ梅鉢にしつらへ上七軒

鉾稚児の父も加はる供の中  
葵揺れ斎王台をうかがはす  
置屋とて二階窓まで青簾  
大文字明けて火床の黄土いろ  
顔見世や棧敷に忘る花名刺  
浴衣着て稽古を付ける芸養子  
門松や紋のれん出る妓の緊張  
川床ゆか開き妓の前挿の代りけり  
寒紅を貝の器に売る花街  
花疲れ逸らす名妓の座持ちかな  
花曇り稽古疲れの妓を起こす  
八朔や鬘ぬぐ妓の中休み  
湯ざめせぬ首白粉の妓なりけり  
鉾稚児の下馬に控への肩ぐるま  
舞台には嫉妬抑へて阿国の忌

妓の奢る稽古帰りの心太

これらは、今までの俳壇に現れてない特異な生活を活写されたものである。曾ての記憶を思い出とはしないで、今見ているように詠む、見たから作句することを提唱している私の言葉を守られての句々である。私はためらうことなく、句集を『京育ち』と名付けた。

京都から堺に移り住まれてからは、小さな室内犬を愛されて、

買初に犬のチーズを求めけり  
犬籠の痕付く畳涅槃吹く

俳句教室にまで犬籠持参の愛犬家であり、犬の死では喪に服されたものである。それとは別に、住吉大社の神馬と親しくなられて、

初夢に神馬の手綱もちにけり  
西瓜食ぶ神馬病みてか毛の湿り  
閉牧に神馬迎への発たれけり  
牧場より避暑帰りして神馬かな

赤い眼をした白い神馬にも愛を注いでおられる。

新しい季語として認められるようになった堺の大夜市に行つては、

夏足袋に魚血痕あり古代糶  
戻されし箱出る章魚や大夜市

を詠む。素材に応じた写真あればこそ、

石鹼玉色かへ日蔭までも飛ぶ  
鼈甲を磨く老眼小町の忌  
石灰を時雨るる池に鯉師撒く  
天候を鷹の高さで匠知る  
抱かる子に一つ先売る太鼓焼  
闘ひし牛大声で洗はるる  
霧吹きに瞬き知らぬ菊人形  
苛めぬに雪解の達磨汚れ色

雛納め箱の中でも向き合はず  
夏座布団間あいだをつめず並べけり

の佳句が成った。

平成十年は「砂丘」創刊五十周年に当ることから、小豆島オリーブ神社に四十三句碑を更に増碑することになって、

語り部や添水の音に間を拾ふ

の青雁さんの句碑も建つ。「砂丘」の句碑の森計九十一基の一つとして後世に伝われば幸いである。

平成十年春

竹中 碧水史



目次

序

竹中 碧水史

上 七 軒

昭和五十五年～六十年

花 名 刺

昭和六十一年～六十三年

芸 養 子

平成元年～三年

銚 稚 児

平成四年～六年

阿 国 の 忌

平成七年～九年

あとがき

装幀 海保 透



句集

京育ち

中野

青雁



上七軒

昭和五十五年〜六十年



昭和五十五年

「ヨーイヤサー」都をどりに間に合へり

落花の下  
軽くうなづき  
別れけり

梅雨晴間徐々に干し物光りだす

夏瘦せに着こなし下手の埒もなし